

大火のない金戸

昭和では大火はないが各地区で火災が発生しており、金戸でも九年と三三年に火事があった。住宅の連なる集落や町部と違い大火にはなりにくい地形であり大火の記録はない。しかし村部である北野や上田での大火のように春風フェーン現象による南風で類焼する可能性は在ったが、金戸では類焼はなかった。

城端には野田の火伏宮・是安の不吹堂・北野・蓑谷共有地の蓑谷山不吹堂などが建立されているように暴風鎮護の宮があるのは、往古より風水害や火災が多くあり、その予防に切なる願いがあったのだ。

公設消防組・消防団

明治維新後、各地の消防組織は町火消などの旧幕藩時代の組織をそのまま継承し、名称も「消防組」「火消組」「水消防組」などと称した。運営母体も市町村による「公設」の組織と地域住民の有志による「私設」の組織が混

在していた。

明治二七年政府は「消防組規則」を制定し、全国的統一を図るべく、消防組未設置の市町村について漸次設置を進めていった。昭和一四年からは空襲から身を守る防空業務も含まれることになり、消防組は警防団に改編された。南山田でも明治三八年に石村正友村長に就任し、消防組を力説し六年後に信末消防組を結成した。大正一二年には南部消防組が結成さ、初代組頭は田嶋与三郎で組合員は三三名であった。昭和六年には金戸に南山田村火の見櫓が完成しているが、昭和一〇年に南山田村全体の南山田消防組合が発足し、そして同年に城端組から譲渡されてたガソリンポンプに、新たに一台が導入された。

昭和一四年に警防団令を公布し消防組規則が廃止された。消防の歴史は明治二七年公設消防組が発足し、昭和一四年に警防団となり、昭和二〇年四月以降は消防団となる。この期間は「人から機械力へ」「消火から防空へ」として「自治消防から統制消防へ」と云われる。町村合併が昭和二七年になり消防団も城端消防団となり、昭和二八年には南山田分団班長に森井信一が就任した。

警防団

戦時体制の警防団になると防空監視隊が業務に加わった。防空監視隊は昭和一四年に設置配置され、隊員は青年学校生徒を対象とし、責任感のある者が永年勤続できる者が選ばれた。この隊員に金戸から森井信一・山本忠一が任命された。

城端消防団五〇年誌「纏まとい」に森井氏が体験談を寄せて、「昭和一六年一二月八日の開戦と同時に、織物組合事務所屋上（現織館）に設置された監視哨で任務に就いた。この日より終戦の八月一五日までの三年九ヶ月、一日一刻の休務も無く監視活動が続けられた。（中略）昭和二十年八月一日夜から二日未明にかけての富山空襲で、城端監視哨は初めて米軍機を捕捉した。当日の当番監視員はこの模様を次のように語ってくれた。

午後九時過ぎだと思う。ゴーと云う爆音が、医王山南方向からこちらに向かって響いてきた。間違いなくボーイングB29であることはいままで訓練で直ぐ判った。小編隊、進行方向東北東、高度一万メートル以下である。直ちに電話機にとびつき通報した。進行方向から見て富山市がやられると直感した。第一報を入れた後まもなく次の

編隊が表れた。その後引つ切り無しに連続して入って来る。やがて爆撃を終えたB 29は東方清水山から袴腰上空へ抜けて行く。この飛行も報告の対象となっていたので第一報入れた後約四時間、何十回通報したか覚えていない。凄しい時間だった。城端監視哨に静寂がもどったのは八日二日午前三時過ぎ。遠く井波町方面の空は富山が燃える炎であったらう。いつまでも紅く染まっていた。

八月一日から二日にかけての米軍機捕捉通報が十番城端監視哨の最初にして最後の実践通報となった。(中略)

戦後五十数年、織物組合会館の上に当時の望楼は無い。戦争の勝利を信じ、短い年月ではあったが敗戦のその日まで、青春の血を滾らせ双眼鏡を手に昼夜空の監視勤務を続けた私共は、十番城端の望楼を支えてくれた織物会館の前を通る度、云いような無い感慨を覚えるのである」と綴っている。

金戸の消防

金戸の「重要記録綴」に消防団について記述が残っている。昭和九年に南山田消防団統一についての村の取り組み方が協議している。

十二月十三日 役員会

「一、南山田消防団統一二関スル件
村道提案ノ南部消防組合信末消防組及新ニ寄附ノ□□ポンプヲ統一シテ南山田消防組トシポンプ置場ヲ寄附地ニ将来固定スルトノ条件ハ之ヲ棄ツルカ中央付近ニ今一ヶ所置場ヲ設置スルカノ条件ニアラザレバ本区ハ国広と共同統一ヲ替セサンコト
右村当局及村人員へ請願スルコト
一月十一日

一、消防手選定ノ件

南山田消防手六名ノ選定方ハ将来在郷軍人分會金戸支部ニ一任スルコト
組合の統一条件として、南山田小学校付近に一カ所ポンプ置場を設置することを第一とすべきとしている。

また消防手の選定について「在郷軍人分會金戸支部一任」あるは、民間の有志による戦争目的遂行のために軍統制の協力団体の組織化であった。各地の青年団・在郷軍人会・消防組などを中心とする「自衛団」が軍協力組織となり、民衆を積極的に秩序維持に協力する団体となっていた。

昭和一〇年の「重要記録」には、

「左記南山田消防手ヲ命ス、

角丸長一郎 宮本喜平 江 久吉

片桐金蔵 宮塚孝口治 中仙道高光

左記南山田消防手依頼免職

竹山籐三郎 松田伊三郎

品川市郎」とある。
その消防団には村としては助成が昭和三十一年に協議に上り、昭和三十四年から一〇〇〇円が初めて支給されている。

金戸は各組より一名が団員として任命されている。

昭和三十一年の手当が年額壹千円とある。三十六年式千円三十七年参千五百円・四十年五千元・四十九年壹万円・六〇年一六五〇〇円・平成四年二五〇〇〇円・六年三五〇〇〇円が支給されている。

